

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。

新年らしい音楽といいますと、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団がニューイヤーコンサートで演奏する、ヨハン・シュトラウスのウィンナワルツを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。特に有名なのは、「美しく青きドナウ」で、毎年、ニューイヤーコンサートでは必ず演奏されます。ウィンナワルツというくらいですから、このような明るく楽しい、いわゆる娯楽音楽は、ウィーンで、ベートーヴェンの死後、急速に人気を博すようになりました。ヨハン・シュトラウスは、父と息子の二人がいまして、美しく青きドナウは、息子のヨハン・シュトラウス 2世が作曲しました。他にも、エドゥワルト、ヨーゼフなどの息子がおり、彼らは、ワルツやポルカなど、民衆が楽しめる曲をたくさん作曲しました。

19世紀初頭のウィーンでは、600年続いたハプスブルク帝国の衰退が徐々に見られるようになり、市民階級が台頭し始めました。また、政治的な背景から、ビーダーマイヤー文化が開花し、平凡でも楽しく暮らしたいという風潮になっていきました。その風潮から、毎晩のように舞踏会が開催され、そこで踊るための音楽が大流行したのです。「美しく青きドナウ」は、ドナウ川の漣を思わせる前奏から静かに始まり、その後、あの有名な旋律が出現して、ダンスが始まります。その旋律が2度繰り返されると、次の旋律が始まり、その新しい旋律と旋律の間には、ダンスのパートナーを変えられるように、短い間奏が入ります。次々と新しい旋律が同じように現れ、最後は、再び、もとの旋律に戻り、クライマックスに向かうという、とても華やかで典型的なウィンナワルツです。この曲を舞踏会で踊るウィーンの市民階級の人々の楽しそうな様子が目に見えるような音楽です。

ウィンナワルツは、ワルツの中でもステップが技巧的で、小さく輪をかきながら、大きくワルツのリズムで踊るといえるもので、目が回るような大胆なダンスです。私は、何度か、オーストリア大使を招いてのパーティで、大使のエスコートで踊ったことがありますが、とても難しかったことを思い出します。しかし、さすがオーストリア大使、素晴らしいエスコートでなんとか踊りきることができました。

ウィーンでは今でも、2月の謝肉祭の時期に、100を超えるたくさんの舞踏会が開催されます。オペラ座で開催される舞踏会では、20歳になった若い男女が、社交界にデビューするデビュタントと呼ばれる儀式が行なわれ、真っ白いドレスの女性と第一礼装の男性が入場し、ウィンナワルツを踊ります。この舞踏会は、少々入場料がお高いのですが、一般の人でも楽しむことができ、古きよき時代のウィーンの雰囲気を楽しむことができます。

ちなみに、ドナウ川は、ウィーンを中心地をそれて流れていて、実は、ちっとも青くないんですね。青き、というのは、ドイツ語でblau(ブラウ)、灰色は、glau(グラウ)というのですが、ウィーン子は、冗談で、美しく灰色のドナウなんて、言ったりします。ウィーン気質は、明るく冗談が大好きなので、こんなことを言いつつもこの曲をととても愛しており、第二のオーストリア国歌とも言われています。

